

【彙報】

◎ 二〇一五年度大会（二〇一五年七月二五日）

【研究報告】

武藤三代平 「駐露公使期における榎本武揚のインテリジェンス活動

— 科学知識と情報収集 —

亀岡 敦子 「明末清初における福建龍溪県の白石丁氏について」

鈴木 山海 「近世ドイツ帝国における帝国裁判所—1652年帝国宮

内法院令」の歴史的意義をめぐって」

井上 将文 「中堅代議士時代の東郷実の政策構想」

矢原 史希 「峠下型細石刃核の分類と検討」

【講演】

満菌 勇（北海道大学大学院経済学研究科准教授）

「『日本型流通』の近現代史—小売革新の展開と「消費」「労

働」「地域」

松村 史穂（北海道大学大学院経済学研究科准教授）

「毛沢東時代中国の貿易構造と国際環境」

◎ 二〇一五年度総会（二〇一五年七月二五日）

総会にて北大史学会の委員・会計監査が以下の通り選出された。

【委員】 川口暁弘・佐藤健太郎・松嶋明男・権錫永・高瀬克

範・武藤三代平・末森晴賀・安酸香織・北山祥子・今

泉和也

【会計監査】 橋本雄

次に二〇一四年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認された。

I. 収入

前年度繰越金

一、〇一〇、五三一円

二〇一四年度収入

三九〇、三三九円

（内訳）

会費

三七〇、〇〇〇円

広告代（北大出版会）

五、〇〇〇円

抜刷代立替返却分

四、二七〇円

会誌販売代金

一、〇〇〇円

銀行口座利息

六九円

合計

一、四〇〇、八七〇円

II. 支出

（内訳）

『北大史学』五四号・『史筵』一一号出版費用

（印刷代〈含・抜刷代〉および振込手数料）二七八、九一〇円

郵送費（『北大史学』発送費用）

二六、四〇八円

郵送費（大会・例会案内等）

一三、五九六円

事務費用（宛名ラベル・封筒印刷）

一八、五〇二円

次年度繰越金

一、〇六三、四五四円

合計 一、四〇〇、八七〇円

◎ 月例研究会

二〇一四年一月二日

前田亮介（北海道大学大学院法学研究科准教授）

「全国政治の始動——帝国議会開設と藩閥体制の変容 一八九〇—一八九九」

◎ 二〇一四年度卒業論文・修士論文発表会（二〇一五年三月三日）

【卒業論文発表】

高棹 大輔 「戦間期における天皇・皇太子警衛の変化と皇室イメージ」

新田 絵梨 「一七九八年一〇月のカイロ反乱と民衆」

鈴木健太郎 「MLBから見るポスティングシステムの有用性—投資を成功させる要素—」

佐藤かなる 「色から見る中世ドイツ社会」

【修士論文発表】

鈴木 仁 「樺太における文化運動の展開」

末森 晴賀 「サルベイオウルの騒乱と19世紀の西アナトリア社会」

安酸 香織 「一六四八年ウエストフアリア条約におけるエルザス讓渡問題—十都市同盟をめぐる交渉を中心に—」

渡辺つづり 「東日本における鉄斧の研究」

◎ 二〇一四年度博士論文・修士論文・学士論文題目

〈日本史〉

● 博士論文

菅原 慶郎 「近世における俵物・諸色の研究—北奥・蝦夷地を事例に—」

● 修士論文

阿部 哲也 「第一次幕領期における八王子千人同心の蝦夷地移住」

鈴木 仁 「樺太における文化運動の展開」

薛 佳瑩 「留日遊日中国人がみた日本文化の二重性—南京国民政府を中心に—」

蘇 思茜 「中国東三省による日本への軍事留学事業—張作霖・張学良政権前後を中心に—」

張 聰 「土倉・酒屋と室町幕府の關係に関する研究」

李 文睿 「遣明船諸役者の研究—禅僧を中心に—」

和田 直樹 「戦後北海道における新生活運動」

● 学士論文

太田 直宏 「日英同盟存廃問題の展開」

齋藤 彩 「室町期比丘尼御所の研究」

高宇 香月 「日本古代における殺生禁断」

高棹 大輔 「戦間期における天皇・皇太子警衛の変化と皇室イメージ」

中川 裕也 「寛保津波と松前藩」

野口飛香留 「室町時代の陰陽師—室町幕府との関わりを中心に—」

宮本 祐佑 「室町時代の寺社造営に伴う材木の調達と流通」

## 〈東洋史〉

### ●修士論文

伊藤 大介 「一九世紀ブハラとその時代」

末森 晴賀 「サイベイオウルの騒乱と一八世紀の西アナトリア社会」

### ●学士論文

大楠 晋也 「洪武朝期の対モンゴル政策」

新田 絵梨 「一七九八年一〇月のカイロ反乱と民衆」

三好 一真 「一六八八年政変と後期アユッタヤー朝」

## 〈西洋史〉

### ●博士論文

田村 理 「イギリス奴隷貿易廃止運動の歴史的意義——リヴァプール  
のウィリアム・ロスコーを中心に——」

### ●修士論文

鈴木 山海 「近世ドイツ帝国国制における帝国宮内法院 (Reichshofrat)——一七世紀から一八世紀における訴訟を中心に——」

真柄 薫 「第二次世界大戦後のイギリス中等教育改革と保護者」

新沼 孝太 「セプティミウス・セウェルス帝によるコンモドウス帝  
神格化再考」

安酸 香織 「一六四八年ウエストファリア条約におけるエルザス讓  
渡問題——十都市同盟をめぐる交渉を中心に——」

### ●学士論文

垣見 亮太 「近世オランダにおける商業と経済」

佐藤かなる 「色から見る中世ドイツ社会」

一之瀬 叡 「十八世紀ザクセンにおける磁器産業の成立と発展」

加藤悠太郎 「デイベリウス政権におけるリウイアの影響力」

入川 修平 「古代ローマにおけるテヴェレ川の洪水とその対策」

吉中 嵩宙 「古代ローマにおける家族と捨て子」

木藤 瑛子 「フランス革命期農村における民衆運動」

立花 美里 「転換期ロシアを生きた女性たち（一八六一—一九一七）」

森本 輝 「帝国を巡る葛藤——イギリス自由主義時代の海軍——」

竹澤 絵吏 「近代郵便制度の誕生——ヴィクトリア期の社会と文化の  
再編——」

廣田 一輝 「戦術的観点から見るアルマダ戦争」

## 〈歴史文化論〉

### ●修士論文（歴史学分野のみ）

相馬 未里 「元七三一部隊関係者による証言資料の収集、データベ  
ーシ化、内容分析」（特定課題研究）

張 岩 「近代日本の簡易生命保険に関する研究」

黄 偉隴 「政治的側面から見たイコノクラスム」

### ●学士論文（歴史学分野のみ）

石川 了慈 「賀川豊彦の平和思想」

鈴木健太郎 「MLBから見るポステイングシステムの有用性」

## 〈北方文化論〉

### ●修士論文（考古学分野のみ）

渡邊つづり 「東日本における鉄斧の研究」

### ●学士論文（考古学分野のみ）

佐々木進輔 「続縄文期後半における住居址未検出の要因について——  
炉址構造の分析による——」

## ◎ 研究室便り

### 〈日本史〉

春はわかれの季節である。二〇一一年四月から日本史学講座の助教を務めていた平井上総氏が、花園大学文学部日本史学科専任講師（中世史担当）に転出した。花園大学は京都市中京区西ノ京にあるラグビーの聖地は東大阪市の施設で無関係である。今回、平井氏の赴任によって初めて知った。今後のご活躍と一刻も早い准教授昇任を祈念する。

置戸合宿が今年も行われた。白木沢の引率である。八月二日～二四日の三泊四日で日本史学講座と教育学部・辻ゼミ（社会教育）の合同合宿として行われ、参加者は総勢二十名であった。置戸町の戦後社会教育関係文書の目録作成を行い、二日目には境野地区での交流会を行った。

史料調査を兼ねたゼミ合宿があった。近世学部ゼミ合宿が九月一日～二三日の日程で斜里町本町に行われた。川端和子家文書調査（文学部斜里研究室の向かいの旧家）を兼ねている。近代初頭から戦後まで特定郵便局長を務めた旧場所支配人家に伝存した文書約千点の整理に参加した。また別件で、斜里町立知床博物館・北海道博物館アイヌ民族文化研究センター・東京農業大学（網走キャンパス）との共同調査に、谷本と近世学部ゼミ生が参加し、史料整理・目録作成・写真撮影を行った。

今年も研修旅行で二年生を佐賀・長崎方面に連れ出した。引率は橋本である。九月一三日～一七日の日程で、軍艦島、グラバー邸、三菱造船所、と近代史に関する史跡を廻り、新しい図書館運営で注目を浴びる武雄市図書館にも足を運んだ。

書くべき記事を持ち合わせないと昨年の本欄で書いたが、それは筆者の不徳と怠惰の致す所であったことが判明して汗顔の至りであ

る。（文責：川口）

### 〈東洋史〉

本年十月現在の東洋史学講座は、教員四名、専門研究員二名、学振員一名、博士課程大学院生四名、修士課程大学院生二名、そして学部学生二〇名から成っている。

まず明るい話題として、OBの小林晃氏が本年十月に熊本大学文学部・准教授として採用されたことを喜びたい。これまでの着実な研究の蓄積が正当に評価されたということであり、氏のさらなる活躍を期待したい。

教員関連では、三木聰氏が、これまでの論考を集成する形で二月に『伝統中国と福建社会』を汲古書院から出版した。定年を迎えた今年度は名誉教授となったが、特任教授として引き続き研究・教育の両面で活躍している。吉開将人氏は、一年間のサブティカルを利用して、未完結の研究課題を完結、未出版の共著を出版することに力を注いだ。このほか、十二月に北京故宫博物院の「古物陳列所百年記念学術研究会」に参加し、「史料考証与故宫以及古物陳列所史」を発表した。新年度四月からは科研費基盤（C）「中国共産党と多民族史論」を獲得して新規研究遂行中。守川知子氏は、サブティカルがなかなか取れないことから例年通り精力的に活動中で、バンブルクやサンクトペテルブルクでの国際学会に参加した。また、*“Pilgrims beyond the Border: Immigration at Kanagin and Its Procedures in the Nineteenth Century.”* を東洋文庫欧文紀要に発表したほか、文学研究科での公開講座をもとにして「イランの王さま、ヨーロッパへ行く」（細田典明編『旅と交流 ―旅からみる世界と歴史』、「ペルシア宮廷のワインとシャーベット」（細田典明編『食と文化 ―時空をこえた食卓から』）を執筆した。来年二月

末には、昨年のシンポジウム「人の移動・移住とその記録」を踏まえた編著書『近世アジアの地域像』を北海道大学出版会から刊行予定である。佐藤健太郎は、数年来進めていた東洋文庫所蔵フェス（モロッコ）の契約文書に関する共同研究の成果『The Vellum Contract Documents in Morocco in the 16th to 19th Centuries』を共編著として東洋文庫より出版した。なお、専門研究員の亀谷学氏も共同研究の一員として本書に寄稿している。

東洋史学講座では、春にWebサイトをリニューアルした (<http://asianhistory.let.hokudai.ac.jp>)。研究室の行事や近況など、折に触れて情報発信をしていくので、ぜひ一度御覧頂きたい。（文責：佐藤）

#### 〈西洋史〉

二〇一五年の西洋史学講座は、教員四名の顔ぶれは変わらず、それぞれが研究と教育に邁進する一年となった。学務では、山本文彦先生が副研究科長の重責を担い、長谷川貴彦先生が講座主任を務めておられる。砂田徹先生は、ラテン語の歴史的大著の翻訳に専念するため、後期にサバティカルを取得なさった。先生のゼミや授業等はお休みとなったが、文学部五階の砂田教授室に詰めて仕事をなさっておられたので、講座が寂しくなることはなかった。近々と伝えられる訳書の刊行が楽しみである。

本年、西洋史学講座を学ぶの場とする者は、専門研究員が四名、博士課程の院生が二名、修士課程が六名、学部が四二名の計五四名であった。

まず、西洋史学を学ぶ大学院生の中から、日々努力を惜しまず、大きな成果を上げる者が現れたことは心強かった。田村理君、三月の博士課程修了、博士号取得おめでとう。専門研究員としても、弛

まず精進してもらいたい。これまでと変わらず、研究室のルールモデルとして、後輩達のメンターとして、大事な役割を務めながらも自分の学業にも精進して、立派な研究者になってほしい。併せて、当講座の博士課程に、久々に二名の院生が進学したことも言祝ぎたい。いずれもドイツ中近世史の山本ゼミに所属し、優れた修士論文を執筆した鈴木山海さんと安酸香織さんである。優秀な彼女らが大学院でさらなるキャリアを積む道を選んだことは、教員一同にとって大いなる喜びであった。先の文部科学省の通達を中心に、人文科学のみならず、文系学部全てのパフォーマンスに冷やややかな視線が向けられる時代ではあるけれども、ぜひ大学院での学びによって大きな実りを手にし、人生に花を開かせてもらいたい。

学部の学生は、新二年生に九名を迎えた。例年に比べると数がやや少なく、また男女比が大きく男子に偏っている。その傾向が昨年の講座説明会の時点から既に顕著であったため、気にかけていたのであるが、結果的に進学者の構成にそれがそのまま反映されることとなった。ただ、今年の新二年生は、数は少なくとも多士済々であり、少数精鋭として鍛えて行けるのを楽しみにしている。なお、今年の一年生向けの講座説明会では、人数・男女比とも平年並みに戻っており、あまり新傾向を心配する必要は無さそうである。（文責：松島）

#### 〈歴史文化論〉

本年度の歴史文化論講座は、教員五名、博士後期課程七名、修士課程五名、研究生二名、学部生三五名、専門研究員と共同研究員が一名ずつの五一名で始まりました。昨年度の総勢七五名と比べると、今年度はやや少ない学生数でのスタートとなりました。なお秋からは新たに一名の研究生が加わっています。

本講座は歴史学分野と文化人類学分野に大別されますが、専門領域や国籍を超えた研究活動や交流が活発に行われています。その一例となる「北海道歴史文化研究会」は、歴史文化論講座と北方文化論講座所属の院生、若手研究者が中心となって運営され、二〇一四年四月から二〇一五年六月までに研究会を三回、「形の文化会」との共催研究会を開催し、研究発表が行われました。また六月に学術交流会館で開催された地中海学会大会には、三名の院生が裏方として参加し、さまざまな分野の研究者と交流を持つことができました。教員の動向については、二〇一五年四月に村田勝幸先生が教授に昇進されました。学生については、博士後期課程の金榮美さんが九月に博士号を取り、現在韓国の江原大学の非常勤講師として教壇に立っています。また共同研究員である滝口良さんは、六月から専門調査員として在モンゴル日本大使館に勤務しています。お二人のますますのご活躍を期待したいところです。

教員間の国際交流としては、四月に、韓国の国民大学の金東明先生が客員研究員として来られ、「北海道の文化政策」についての研究を進め、九月に帰国されました。

本講座の研究室は、一九九七年に国の登録有形文化財に指定された古河記念講堂一〇一号室にあります。建物は古いですが、院生ロッカーの設置、パソコンの入替などが行われ、学生同士の交流ができる場であるとともに、研究活動にも腰をすえて取り組める環境が整えられています。

なお、最新の歴史文化論講座所属の教員・学生の研究に関する情報は、講座HP (<http://www.hucec.hokudai.ac.jp/~q16685/>) をご覧頂きたいと思います。(文責：権)

#### 〈北方文化論〉

二〇一四年度の北方文化論講座(考古学、文化人類学・博物館学、民族言語学)の構成メンバーは、教員四名、博士後期課程七名、修士課程一三名、研究生一名、学部生一三名の、計三八名です。

考古学分野では、夏季の野外実習として第四回豊浦町礼文華遺跡の発掘調査を実施しました(二〇一五年九月七日～九月二〇日)。続縄文文化期の墓地の調査を本格的に開始し、墓坑中から人骨の一部を確認するなど大きな成果がありました。同遺跡では一般の方々を対象とした体験発掘・現地説明会、礼文華小学校児童の体験発掘などを実施し、九月一四～一六日には昨年度まで日帰りで見学してきた北大一年生対象の全学教育「フィールド体験型プログラム」を二泊三日で実施するなど、地元への情報発信や教育の場としての活用を活発化させています。豊浦町教育委員会・豊浦町郷土研究会の方々からは、今年も多大なご支援・ご協力を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

教員の活動として、小杉教授は東海考古学会・日本考古学協会で発表したほか、長野県鷹山遺跡の調査研究に多くの労力を費やした一年となりました。また、高瀬准教授は、千島アイヌの考古学的研究にかかわる新たな科研費のプロジェクトを開始しました。

二〇一四年度は、学部卒業生と修士課程修了生がそれぞれ一名と少ない年でしたが、兩名とも希望する進路にすすむことができました。修士課程を修了した渡邊つづり氏は、豊浦町教育委員会に学芸員として就職しました。北大で培った専門性を活かして、これからも活躍されることを願っています。同時に、豊浦町は本講座が毎年実習でお世話になっている自治体でもありますので、あたたかい目で後輩の成長を見守ってもらえればと思います。(文責：高瀬)